

北の療育

● **報告** 令和5年度決算報告

● **連載** いのち、そして普遍的な人権とは

—日本文化、日本的エートスの源流をさぐる—/蒔田明嗣

北の療育 273号

● 巻頭随想

- ・“いのち”と人権 ————— 松尾 彰久 — 1

● 岡田喜篤先生、安らかに ————— 3

- ・岡田喜篤先生 ありがとうございました ————— 丸山 静男 — 4
・2015年、美幌にて ————— 宮上 憲之 — 5
・岡田理事長との思い出 ————— 秦 俊彦 — 6

● 特集 いのち、そして普遍的な人権とは —文化の違いを乗り越えて、新たな地平に辿りつけるか—

<第2回>

- ・日本文化、日本的エートスの源流をさぐる ————— 蒔田 明嗣 — 7

● 第22回美幌北療祭を開催して

- ・『青』～青空の下で再び動き出す～ ————— 加藤 恵 — 21

● 療育園夏祭りを開催！

- ・～5年振りに父母も参加、大きな打ち上げ花火も実施～ — 多田 貴之 — 23

● グラビア・療育園夏祭り／第22回美幌北療祭／つつじの里夏祭り 26



● 家族の皆さんを招いて、つつじの里夏祭りを開催！ — 吉田 秀吉 — 31

● サンルーム・春から夏の療育活動

- ・病棟内の療育活動について ————— 北海道療育園 — 岡本咲希奈 — 35
・療育と活動について ————— 美幌療育病院 — 畠山健一郎 — 37

● 旭川通園だより

- ・楽しい毎日と一緒に ————— 安藤 弘貴 — 39

■ ワークセンターびぼろ

● びぼろだより

- ・桜見学&散策、GH花壇整備、総合防災訓練 他 ————— 浦野 紘史 — 41

● あすなる通信

- ・北療祭の準備、北療祭「青」 他 ————— 内田 久勝 — 43

CONTENTS

2024.9

● らせん

・毎日の当り前の生活のなかに、健康の要素がつまっている — 小林 昭典 — 45

● つつじの里だより

・活動紹介：日帰り旅行、ゴールデンウィーク外出、お腹いっぱい!! — 47

● つーるぼっくす（リハビリテーション工学）からの 支援、最近の取り組み

星出 和哉 — 49

● 旭川市医療的ケア児総合相談室を開設して — 木曾 賢一 — 53

● みち

・重症児（者）を守る会60周年を迎えて — 齋藤 忠義 — 54
特定非営利活動法人 とらいあんぐる事務局通信

・本格的な夏を迎えて — 長野 聡幸 — 57
美幌療育病院父母の会事務局通信

・平成18年の危機が再来? — 植村 規 — 59
つつじの里利用者と歩む家族の会事務局通信

● 令和5年度決算報告 — 木村 浩司 — 67

● ご厚意ありがとうございます

・寄付金一覧 ・物品寄贈一覧 他 — 78

・職員異動一覧 — 79

インフォメーション

・韓国から福祉研究所の皆さんが来園／春光台エコチャレンジ、福祉村地域を対象に開催! — 25

・高台小学校の児童が当園を見学、利用者さんと交流しました! — 30

・三浦綾子記念文学館の賛助会員友の会旭川支部の皆さんが来園! — 30

・作業療法作品の紹介「ともだち」第二療育課 高瀬繁男さん — 34

・大崎先生、近澤先生がご退職／5年ぶりに環境整備を実施! — 44

・＝コラム＝最近考えたこと／蒔田明嗣 — 51

・第11回美幌療育病院花火大会開催!／福沢優子 — 62

・北海道療育園のハイエースに小学校の児童がペインティング／
イオンの黄色いシート事業で備品を購入 — 63

・看護師さん募集! 笑顔・いのちの輝き。かかわること。看護の原点がここにあります! — 64

・ブックスタンド「生命倫理学と障害学の対話
— 障害者を排除しない生命倫理へ」アリシア・ウーレット著（生活書院） — 65

“いのち”と人権

松尾 彰久

今年一月元旦、能登半島が地震に襲われた。帰省してきた家族と久しぶりに顔を合わせて、さあこれから団欒の時間を愉しもうというまさにそのときであった。テレビを見て知った私たちも「まさか!」という衝撃に打たれ、その不条理さに何か怖れにちかいものを感じたのではないだろうか。私はそのとき高村薫のことを思い出した。

重厚な推理サスペンス小説『マークスの山』で直木賞（一九九三）を受賞した高村薫は、近年、新聞や雑誌などに硬派な社会時評を掲載する言論人としても活躍している。自分と同年代ということもあり、ずっと気になる作家の一人であった。高村は（詳しくは承知しないのだが）クリスチャンの家庭に育ち小さなころから教会には馴染んでいたらしい。出身大学も国際基督教大学である。その高村が「一九九五年一月、私は大阪の自宅で阪神淡路大震災に遭遇した。それを機に、私の四十二年の人生は文字通り根底から変わった。いかなる信心にも無縁だった人間が突然、仏を想ったのである。（中略）長らく近代理性だけで生きてきた人間が、人間の意思を超えたもの、言葉で言い当てることができないものに真に直面し、そのことを身体に刻んだのだ。以来、手さぐりで仏教書をひもとき、仏とは何かと考え続けて今日に至っているが、それでも信心なるものにはいまなお手が届かない。」と作品『空海』（二〇一五新潮社）の序文に書いている。

近代理性とは西洋の人間中心の世界観である。幼いときから身近にキリスト教の環境があった高村にとって、近代理性の世界観をもつことは自然だったのかもしれない。しかし高村も日本人である。「阪神淡路大震災に遭遇」し「突然、仏を想った」のである。

しかし、「仏を想った」というその「仏」とはいったい何だろう。亡くなった人のことを「仏」ということもある。しかし高村はたんに亡くなった人を指しているのではない。もっと全宇宙（自然）的なものの中に存在するすべての「いのち」をイメージしているのではないかと思う。日本人は無宗教であるときよくいわれるように、多くの人は空海の真言密教の教義などまったく分からないし、最澄、法然、親鸞、道元……などの違いもほとんど知らないといつてよい。それでも気が付いたら拝んでいる。お遍路へ行く人も多い。日本人の精神構造の基底には拝みたく

なるような“いのち”のイメージが存在しているのかもしれない。

『空海』という作品は、共同通信社が企画し高村とともに「二十一世紀の空海の肖像を探る旅に出る」という思索ドキュメント形式の作品である。当時（二〇一四年四月から翌年四月まで）東北から九州までの新聞二十五社に配信されたものを単行本化したものである。しかしなぜ共同通信社がこのような空海をめぐる企画を立てたのか。やはり一つの契機は、高村が遭遇した阪神淡路大震災と同じように、あの東日本大震災の衝撃的な被害を経験したということがあっただろう。そしてその背景には、現代社会に生きる私たち日本人のどこか満たされない心の問題を探りたいということもあるのかもしれない。さらに、よりグローバルな視点に立つてみると、日本がこれまで懸命に取り入れようとしてきた西洋文明について、とくに第二次世界大戦後になると、西洋自らがその限界を言い始めて東洋あるいは日本の文化に注目しているというようなこともあるかもしれない。いずれにせよ人間がこの社会のなかで生きていくとはどういうことなのか、日本人とは何か、という根源的なものを探る旅を空海という一人の傑出した僧をおして考えるということなのだろう。

さきほど、日本人の精神構造の基底には“いのち”のイメージがあるのではないかと書いた。それはきわめて直観的である。一方、西洋の近代理性は、個人の自律と自由を創造し科学技術と結びついて劇的に社会を発展させてきた。こちらはあくまで論理的にみえる。そして“いのち”を直観的にとらえる日本人は重症心身障害の福祉制度をつくった。近代理性の方は、個人の自律と自由を基盤にして、平等とか人権という普遍的な権利体系を論理的につくり上げてきたといえるかもしれない。そしてさらにノーマライゼーション、インクルージョンという実践思想につなげてきている。

日本人は明治以降、西洋の近代理性を受容しようと努力してきたが、いまだ表面的な理解しかできていないといっても間違いではないだろう。平等も人権も真に受容しきれないという葛藤がある。しかし、高村が「仏を想う」といった“いのち”のイメージをもつことは、平等や人権に先立って大事なことであり私は思うのである。ここが近代理性の弱点ではないかと考えている。問題はこの二つをどう融合させるのかということである。二者択一ではなく融合は、可能なのか。

● まつお・あきひさ

社会福祉法人北海道療育園・専務理事・法人事務局長